

〔書評と紹介〕

村井章介・斉藤利男・小口雅史編

『北の環日本海世界』

―書きかえられる津軽安藤氏―

佐々木 馨

本書の母胎は、青森西津軽郡深浦町で平成三年（一九九二）から平成十一年まで、九年間にわたって開講された「深浦町民大学―人づくり連続歴史講座」にある。十周年を迎えた二〇〇〇年九月二十三日、その集大成を兼ねて「深浦歴史シンポジウム」が「環日本海世界のなかの津軽・西浜・安藤氏」を首題に開催された。本書は基本的にはその記録である。しかし、よく目にするシンポジウムを再現しただけの「シンポ報告集」ではない。編集担当者が編集のプロセスにおいて、報告者に加筆・増補をお願いする一方、当日大きな話題を呼んだテーマについて新たに「コメント」を加えるなど、じつに細心の行き届いた配慮を施しているからである。

当日の刺激的な新知見の講演と報告、目からウロコが落ちるような白熱のパネルディスカッション、そしてこの優しい気配りの編集内容を満載した本書を、編集代表の斉藤利男氏が「はじめに」の中で、本シンポジウムを研究史上に適切に位置付けながら「現在活況を呈している北方史研究・安藤氏研究に対して、従来の研究にない新たな問題提起を行うものであることを、編集の一人として強調したいと思う」と評価した。

この自己評価が決して過大ではなく客観的であることは、シンポの参加者は先刻承知であろうし、これから読まれる方もきっと、読破後に「全くその通り」と合点されるに違いない。

では、早速、本書の構成を紹介することにしよう。

はじめに

斉藤 利男

I 中世国家の境界―外浜・津軽を中心に

村井 章介

II 北の環日本海世界と安藤氏

1 古代日本海世界北部の交流

小嶋 芳孝

2 中世港湾都市 十三湊遺跡の発掘調査

榊原 滋高

3 中世深浦と葛西木庭袋氏

森山 嘉蔵

4 日の本將軍安東氏と環日本海世界

遠藤 巖

III 北の環日本海をめぐる

討論 「環日本海世界北部の社会・文化と交流」

（文責）小口 雅史

コメント

胡馬と蝦夷の馬

菊池 俊彦

安藤氏の乱と西浜折曾関・外浜内末部の城郭遺跡

斉藤 利男

「北からの日本史」と「南からの日本史」と

柳原 敏昭

おわりに

高橋 孝男・小口 雅史

本書はご覧のように、三部から成る。第一部は記念講演、第二部が四

本の個別報告、第三部がそれを受けたパネルディスカッションと既述した三つの「コメント」である。

月並みであるが、この順に従い、その内容を紹介しよう。村井氏の講演は、中世国家の境界に関する学説史を回顧しつつ、自説の「同心円的空間観念論」を踏まえた北方史研究の現況、すなわち「境界権力論」、「家譜・系図」、「説話・縁起」（素材論）、「仏教各派の教線拡大」の四つのアプローチの紹介に幕が開く。ついで、具体的史料によりながら、「交易」をキーワードにした有益な指摘を展開。例えば、国家の境界が伸縮ないし浮遊するのは、薩摩国の千竈氏と津軽の安藤氏の「讓状」を例証にして、「交易」の営みの結果であるという指摘、北方史においてこうした境界の内側と外側の交易を介した雑居性の存続が鎌倉幕府の滅亡後も安藤氏を延命させたという説示。仏教の教線の受け皿となったのも政治的版図を越えて交易を展開する港町の商人層であったという提示などである。これらの指摘は、いずれも今後、北方史研究を前進させる上で貴重であることは多言を要しない。

第二部は新知見と大胆な仮説の連発に参加者を興奮の渦に卷いた個別発表である。一番手の小嶋氏が、いきなり奥尻島青苗遺跡の石室墓は着火儀礼から考えて、北方文化の影響を受けた七世紀ころの倭人世界と関係する人物の墓と推定した上で、北海道南部に集中して出土する錫製装身具、銅鈴、玉製耳飾りも、ロシア沿海地方の靺鞨人がもたらしたもの、さらに、阿倍比羅夫の渡嶋渡航も蝦夷―靺鞨―唐の連携を警戒した飛鳥朝の北方情報の蒐集に目的があったと大胆に推断した。

この論調に乗って氏は、奥尻島に出土する馬と人物図を練刻した土器

碗は、蝦夷世界と女真に共通する防御性集落からして、十世紀の奥尻島が沿海地方から渡来する馬の經由地を示す遺物とぶち上げ、最後にこう問題を提起した。「私は、蝦夷と沿海地方南部の女真との直接交易はモングルの支配下に入った段階で衰退し、その後、沿海地方北部にあるアムール河の河口周辺に交易地が集約され、サハリンを経由する交易ルートができあがったと考えています。」と。まさに、十三世紀を機にした日本海世界北部の交易システムの一大転換説の提示である。

二番手に登場したのは、十三湊遺跡の直接の発掘担当者である榎原氏である。氏は本報告が平成三年（一九九一）〜平成五年に行われた国立民俗博物館による学術調査の検証作業の一環であるとした上で、港湾都市十三湊の構造分析の結果、その成立の始期を十三世紀初頭、完成期を十四世紀末〜十五世紀前半、終末期を十五世紀中葉と考えられると、綿密な諸資料に基づきながら報告した。

この現地に根ざされた迫真の報告は、三番手の森山氏にバトンタッチされて、ますます熱を帯びていった。氏は南部軍団の津軽侵攻期の十五世紀末〜十六世紀初めの頃、深浦城を支配統治したのは誰かに論点を焦点化して、実態に迫った。史料制約の中にあつて、その難題を解くのは、唯一、深浦の春光山円覚寺（古義真言宗醍醐派）に伝来する永正二、三年（一五〇五、〇六）および同十五年（一五一八）の棟札であるとした上で、当該期の深浦城を統治したのは、葛西木庭袋伊予守頼清であると結論し、従来の木庭袋氏の非深浦居住説を各種史料の分析を通してながら一蹴した。併せて、シンポジウムの地域開催を踏まえ、葛西木庭袋氏の来歴について分かりやすく解説を施し、葛西氏の全体像の理解に苦心さ

れた。

本シンポの最後の取を勤めたのは言うまでもなく、斯界の第一人者の遠藤氏である。氏は冒頭で「日の本將軍」論の研究史上に、自説を位置づけ、併せて南部氏を軸に史料主義の立場をとる入間田宣夫氏との対比を改めて表明した。その上で、厳密な史料批判によりながら戦国期の安東氏の実体を探り、室町幕府の構想する奥羽における「屋形家」の創出にとつても、安東氏の存在は不可欠であり、それは「時代の要請」でもあったと強調される。南部氏との抗争に敗れ、本拠を失った半浪の安東氏が国制史上に生き残る謎に対する一つの理論構築である。氏は、対外的な地理認識を示す新たな絵図を示すことによつて、「日の本將軍」安東論こそが、入間田氏の「南部パックス」論よりも、環日本海世界にあつては主導的であると力説される。氏は同時に「奥州総奉行」と同様に、「日の本將軍」も比喩や文学的表現ではなく歴史的な実体であることを重ねて主張されたのである。氏の構想する理論の何たるかがこの報告を通して、より鮮明になったように思うのは、私一人ではあるまい。

第三部は以上の講演と報告を受けたパネルディスカッションである。

齊藤利男・小口雅史両氏の手際よい司会で進められた。主要な論点を①「葛西木庭袋氏」論、②「境界伸縮」論、③「十三世紀の交易システム転換」論の三点に集約して、活発にして実り多い議論が展開された。印象的なものを拾ってみると、①の「葛西木庭袋氏」論をめぐる、遠藤氏の小説家的な発想（自称）に基づく「奥州総奉行」↓「日の本將軍安藤氏」論の補論があり、これで意表をついた円覚寺棟札Ⅱ「西国巡礼棟札」説（川島茂裕氏）を納得させた。

②の「境界伸縮」論についても死角をついた質問（工藤弘樹氏、柳原敏明氏）が寄せられ議論が深められた。③をめぐるつも、秋田城と渤海との関係や秋田城に出土した「羽釜」さらには十三湊遺跡と高麗青磁との関わりなど活発な質問が出された。そして最後に榊原氏による将来展望も含めた総括発言でシンポは終了した。

第三部は三つの「コメント」から成り、一つは小嶋報告に対する菊池俊彦氏のコメントである。そのなかで、万葉集の「胡馬」は文学的表現の色彩が濃いこと、アムール河周辺でも馬の飼養が行なわれていたことを指摘している。二つ目は、齊藤利男氏による実地調査を踏まえた実臨場感あふれる「外浜内末部の城郭」「西浜折曾関の城郭」の分析である。仮説とはいえ、かなり確度の高い内容となっている。最後の三つめは柳原敏明氏による分かりやすく丁寧な「北と南からの日本史」の総括と今後の指針であり、その点有益である。

以上、本書は近年、長足の進歩をみせてきた北方史研究の到達点を示すと同時に新たな問題提起を盛り込み、まさに画期的といえよう。その意味で、「はじめに」の部分で齊藤編集代表が自己評価したのは至当である。最後に、ないものねだりではあるが、一点だけ、私の関心事から申し述べさせていただきたい。それは、村井氏も指摘された現行の四つのアプローチの一つである「仏教各派の教線拡大」に関わつてである。パネルディスカッションの中の「西国巡礼棟札」や森山報告の中の大浦光信に身を寄せた前関白、近衛尚通（京都日蓮宗の有力外護者）はもちろんのこと、上ノ国勝山館をめぐる和人とアイヌの混住（網野・石井編『北から見直す日本史』大和書房）に思いを致すとき、やはりまだまだ

広義の文化・宗教史分野の立ち遅れは否めない。しかしその一方で、最後の「汎神論」的な混住説に対して、一部には宗教の対主義的な見解を唱える者もない訳ではない（例えば、菅田慶信氏の『中世奥羽の民衆と宗教』、拙著『アイヌと「日本」』）。今後は、こうした民族と宗教の論点も絡めたより十全な北方史研究が期待される。本書はそうした実り豊かな研究の発表を告げる指南の書であることも重ねて述べ、稿を閉じたいと思う。

（B六判、二一五頁、山川出版社、二〇〇二年五月、一八〇〇円）

（ささき・かおる 北海道教育大学教授）